

## 研究動向

## 留学史研究の回顧と展望

—— 欧米—日本—アジアの「知」の連環と構造を考える ——

平 田 諭 治\*

Yuji HIRATA

## はじめに

こんにちの日本では、国外への留学はほとんど大衆化しており、大学・高等教育機関における留学生の存在は、かなり日常化している。本稿の目的は、日本を中心とした留学の歴史に関する研究動向を概括し、副題にあるような、欧米およびアジアとの「知」の連環という視座から検証・展望することにある。かつて国境を越えて外国に学び、あたらしい「知」を身につけた留学生たちは、一般に帰国してその「知」の担い手ないしは伝達者となり、時として歴史の変革の立役者となった。とりわけ近代世界における「知」の形成と流通・普及を考えると、そのいわば最前線に立った留学生の動静や影響、あるいは主体形成などを問題にしないわけにはいかない。留学および留学生に関する歴史的研究は、筆者が専攻する教育史のみならず、さまざまな研究分野・領域に関係するものであり、多方面から蓄積が重ねられているが、概していえば、欧米への送付・派遣とアジアからの受入・招致という両局面において、ある種の分業体制が成り立っている。これまでのすべての研究成果をフォローすることは不可能だが、本稿においては、そのどちらか一方に注目するのではなく、双方に目配りしながらレビューすることを試み、できるだけ多くの具体的紹介にも努めようと思う。

ここであらためて「留学」の定義を考えようとする、さしあたり小林哲也による、「国境を越えて外国の教育機関で学ぶことであり、個人の教育の過程にかかわる現象であるが、同時に、この留学生を伝達者として、一国の文化が他国に伝播されるという文化現象でもある。留学は教育的目的のための国際人物交流の一形態である」(小林「世界の留学—総論」, 権藤与志夫編『世界の留学—現状と課題—』東信堂, 1991年, 第1章)というのが目にとまる。一見すると問題ない定

\*筑波大学大学院人間総合科学研究科

義のように思われるが、しかし本論でみていくように、歴史に即して考えるならば、小林がいうようなネーションワイドな「国」の枠組を相対化しなければ、組上にのらない留学の系譜が存在するし、国家単位の均一的な「文化」理解を前提にしては、留学の実相や意義を十分にとらえきれない。石附実によると、留学は「古代から現代まで、広く世界的に見られる。国境や文化の壁を越えて、どこかへ何かを学びに行こうとする、知的流れの一つである」という（石附『教育の比較文化誌』玉川大学出版部、1995年）。歴史をさかのぼれば、日本における海外留学は、律令国家の建設に寄与した遣隋・遣唐留学生にはじまるとされるが、近年それにかかわるひとつの重要な発見があった。まずはその発見からどのような知見がもたらされるのか、そこから説き起こしていきたい。

### 1 遣唐留学生「井真成」の墓誌をめぐる

2004年10月、中国・西安で遣唐留学生「井真成」の墓誌が発見されたことが報道され、大きな話題となった。「古代東アジアの交流や、遣唐使の実態を伝える前例のない発見」と、『朝日新聞』（10月11日付朝刊）は第一報をトップで報じている。蓋付きの石製の墓誌は、典型的な中国墓誌の形式を備えた小型のもので、最上端に損傷部分もあるが、楷書の171文字が基盤の目のように整然と陰刻されている。西安の西北大学が購入・入手し、出土経緯は明らかにしていないものの、贖物とする要件はないという。研究は緒についたばかりだが、墓誌文をめぐる注目を集めたのは、主としてふたつの点であろう。ひとつは734年、36歳で没したという井真成の人物像であり、もうひとつは、そこに「国号日本」と刻まれていたことである。墓誌文の結句には「形既埋於異土魂庶歸於故郷」、つまり身はもう異国に埋められたが、魂は故郷に帰ることを願うと記してあり、客死した無名の入唐者に「日本」への望郷の念をみいだしている。その死を惜しんで玄宗皇帝が贈官したとされる、井真成の人物像を探っていけば、留学の目的・要件・意味のほか、どこでなにを、どのように勉強したのかが問題となり、国子監によって統轄される唐の学制との関係も視野に入ってくる。日本列島における「学校」のはじまりである、律令官人の養成機関であった大学寮は、唐制の影響のもとに成立したといわれるが（久木幸男『日本古代学校の研究』玉川大学出版部、1990年）、今回の発見をつうじて、最盛期を迎えた唐帝国との交渉関係から古代学校史を考えるあらたな余地が生じるかもしれない。「学校」の成立とも関係するとみら

れる「日本」という国号については、現存する実物資料としては最古の使用例となる可能性があるという。唐帝国を強烈に意識しながら、「天皇」という称号とともに7世紀後半に成立したというのが定説だが（網野善彦『「日本」とは何か』日本の歴史第00巻，講談社，2000年），その大陸帝国が「日本」を認知していたことも確認できるのである。

ところで2005年にかけて，この墓誌をめぐる国際学術シンポジウムや市民セミナーがあいつぎ，新聞・雑誌やテレビなどのマスメディアもさまざまな形で取りあげた。5月に墓誌が「里帰り」を果たし，おもな国立博物館などで展示・公開されると，さらに関心が高まったようである。『東アジアの古代文化』（第123号，大和書房，2005年）は，「遣唐使墓誌をめぐる日中交流史」という特集を組み，専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本—新発見「井真成墓誌」から何がわかるか—』（朝日選書，朝日新聞社，2005年）も急遽出版されている。おりしも中国各地で反日デモが発生し，日中関係の険悪化が憂慮されるなか，このニュースは「日中交流の原点」として友好的ナショナリズムの相互喚起にも利用されたようだ。筆者は「遣唐使と唐の美術」として開催された東京国立博物館の特別展で現物を実見し，関連イベントとして開催された「東アジアの文化交流を考える」と題する日中共同シンポジウムに参加した。朝日新聞社と人民日報社が主催の，「墓誌発見記念」と銘打ったそのシンポジウムでは，井真成が派遣されたのは717年の第9次遣唐使か733年の第10次遣唐使か，実際に国子監に入って勉強したのかどうかといったことから，「和製漢語」の可能性があるという「留学生」の原義や，唐の対外支配構造そして新羅・渤海との関係にまで視野をひろげる必要性など，非常に興味深い議論と指摘が展開された。いまだ多くの謎に包まれている井真成と留学の実態だが，同時期の有名な留学生としては，吉備真備や唐王朝に重用された阿倍仲麻呂らがいる。当時の東アジア情勢に促されながら，遣唐使とともに続々と留学生や留学僧などが派遣されたのであり，かれらが先進中国の「知」の精髓を「日本」にもたらしたといわれるが，究明すべき課題は少なくないようである。

## 2 日本の近代化と留学

「留学」や「留学生」の語源そして概念形成史は興味あるところだが，石附実によれば，古代日本と近代化にともなう留学は本質的には共通しているという。す

なわちともに、ヨーロッパ中世以来の個人主義的な「教養型留学」に対して、国家が直接関与してその目的に資する「国家型留学」であり、相互に学びあう今日的な「文化学習型」に対して、少数のエリートによる「文明伝習型」であったというのである。もちろん古代と近代では「国家」の位相が異なり、単純に同列視することはできないが、すでに19世紀の各国において、「国家型留学」は特徴的な形態になっていたとされる（石附『日本の対外教育—国際化と留学生教育—』東信堂、1989年、同『世界と出会う日本の教育』教育開発研究所、1992年）。日本では19世紀後半の幕末・維新时期より、西洋文明の摂取・導入を図ろうと欧米先進諸国への留学があいつぎ、明治新政府はお雇い外国人の招聘などとあわせて、近代国家構築にむけた重点施策として積極的に推進する。学校の制度化への統一的なビジョンを指ししめした1872年の「学制」は、その約三分の一が留学関係の規定で占められていたのであり、当時の文部省予算の一割を超える経費が外国留学に充てられたのである。こうした海外留学においては、西洋世界の文明化の圧力が陰に陽に介在しており、異国体験をとおしたナショナル・アイデンティティの模索・発見・確認という所為が、不可避的に組みこまれることになったといえよう。

日本の近代化のための欧米留学、その政策的な意図・背景やその果たした役割・意義については、高度経済成長を背景とした海外進出が顕著化する1970年代以降において研究が進展し、とりわけ「国際化」論が盛りあがるなかで注目を集めたといえる。留学の体制化過程を中心に論述した石附の『近代日本の海外留学史』（ミネルヴァ書房、1972年）は、その先駆的で代表的な業績であって、幕末から明治期全般を包括的に扱った浩瀚な、渡辺實『近代日本海外留学生史』（講談社、上巻1977年、下巻1978年）なども刊行されている。石附の同書の中公文庫版（1992年）には文献紹介が付されており、1990年代にいたる主要な研究成果や研究動向の一端を知ることができる。それによるとこの時期、留学の制度・政策史的究明が促進されるかたわら、個別的・事例的な調査研究が展開され、留学生個々の追跡的な検討を行った伝記的研究があいつぐとともに、留学生の出身地ならびに留学先の特定地域に眼をむけた研究成果があらわれるようになる。留学生だけを対象にしたものではないが、日本の近代化の要因ないしは駆動源を探究しようという意図から、富田仁編『海を越えた日本人名事典』（日外アソシエーツ、1985年）や手塚晃、国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』（全3巻、柏書

房, 1992年)も編纂・出版された。ここで具体的な研究物を網羅することはできないが, 以下ではイギリスへの留学を対象とした, 1990年代以降の成果を中心に紹介してみたい。従来の日本側の史料にかたよりがちであった研究状況を打開・克服しようとし, 日英交流・交渉史の視点から, イギリス側の史料を発掘・照合しながらあらたな解明や位置づけを試みているのが, 特徴的な傾向である。

まずイギリス中等教育史を専門にする藤井泰による, 日英教育交渉史研究の一環としての成果がある。「山尾庸三とユニバーシティ・カレッジ」(日本英学史学会編『英学史研究』第22号, 1989年), 「幕府イギリス留学生に関する一考察―世話人・W. V. Lloydを中心として―」(日本教育史研究会編『日本教育史研究』第9号, 1990年)をはじめ, 近代化の出発点に焦点づけた一連の論考や, 明治期全般, 1910年代にいたる日本人留学生の, 在英史料状況をふまえた調査報告を発表している。井上琢智は, イギリス日本人留学生に関する基本情報を再整理し, 「ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン・コネクションの形成―イギリス留学生とコネクション―」(関西学院大学経済学部研究会編『経済学論究』第57巻第4号, 2004年), 「幕末・明治ロンドン日本人留学生と日本学生会―共存同衆への道―」(『経済学論究』第58巻第1号, 2004年)などを発表した。田中恵子「英国ケンブリッジ, リーズ・スクールへの明治大正期日本人留学生(その1~その4)」(『青葉学園短期大学紀要』第23~26号, 1998~2001年)も貴重な調査報告である。

モノグラフとして興味深いのは, 小山騰『破天荒く明治留学生〉列伝―大英帝国に学んだ人々―』(講談社選書メチエ, 1999年)である。菊池大麓を中心とする留学生の動静を, 当時の大学改革の状況などイギリス側から照射して考察したものであり, かれらが帰国して指導的地位についた近代国家日本の特質を, 「留学」という視点から説明を試みている。「洋行帰り」の伝説や粉飾されがちなエピソードを洗いなおし, その背景を読みとこうとする展開は, 読み物として十分おもしろい。菊池については, 拙著『教育勅語国際関係史の研究―官定翻訳教育勅語を中心として―』(風間書房, 1997年)において筆者も論及したことがあるが, ケンブリッジ大学最初の日本人留学生であるかれは, 「キリスト教という思想的なバックボーンとなんらかのかたちで対応せざるを得なかった」とし, 後年みずから天皇主義に「のめり込んでいった」と小山はいう。「留学」をクローズアップするあまり, 思想形成の内在的検討はかならずしも十分でなく, やや図式的ないしは予定調和的な解釈に陥っているが, 最後にはこう指摘する。すなわち, 「明治時

代の海外留学で獲得した成果は近代天皇制で帳尻を合わせ、明治時代の急速な近代化は戦前の思想的に閉塞した状況で埋め合わせをしたということであろうか」と結んでいる。

日本からの留学者のみならず、日英交流史上に足跡を残した両国の人物列伝としては、サー・ヒュー・コータッツィ、ゴードン・ダニエルズ編、大山瑞代訳『英国と日本—架橋の人びと—』（思文閣出版、1998年、Sir H. Cortazzi, G. Daniels ed., *Britain and Japan 1859-1991: Themes and Personalities*, Japan Society, 1991）、その続編である、イアン・ニッシュ編、日英文化交流研究会訳『英国と日本—日英交流人物列伝—』（博文館新社、2002年、I. Nish ed., *Britain and Japan: Biographical Portraits*, Japan Society, 1994。この原書の続編が2005年までに都合四巻刊行されているが、未翻訳）が出ている。もともとロンドン日本協会創立百周年を記念して企画されたもので、日英双方の研究者が協力・執筆した注目すべき成果といえる。だが個々の伝記的人物論の評価は別として、かかる国民国家を前提とする二国間関係に特化した構成からは、洩れおちてしまう歴史的射程が大きいことにも留意しなければならないであろう。

さしあたり柿原泰による、在来のお雇い外国人研究に関するつぎのような批判は、留学生研究にも当てはまるように思われる。すなわち、「多くの関心がお雇い外国人の日本での活動の解明にあり、彼らの出身国での活動まで調査の対象に入れる場合も、あくまでも日本側からの発想の枠内で、お雇い外国人の来日前・帰国後の活動を調べるところにあったように思われる。また、例えば、日本とイギリスの交流という視角から論じられる場合でも、その問題設定のしかたにもあらわれているように、ある国家（例えばイギリス）と日本との関係という視点を自明のものとして固定化し、直接的な関係に着目するもので、より広く世界的文脈に位置づけるという問題意識は希薄であるように思われる」（柿原「お雇い外国人とイギリス帝国のエンジニア—新たなお雇い外国人研究にむけて—」『東京大学史紀要』第18号、2000年）。「プロソポグラフィー」による、この柿原の論考が成功しているかどうかは別問題とせざるをえないが、帝国のエンジニアの世界的移動という観点から、植民地における科学・技術の展開まで視野に収めようとする、その課題意識は看過すべきでないだろう。上述の小山の著作は「大英帝国に学んだ人々」と銘打ってはいるが、その帝国の動向・構造・意識と関係づけた解明は、今後に残されている部分が少なくない。

もはや西洋を範とする日本の近代化の方途として、一国史レベルで留学を把握する認識枠組からは抜けだす必要が生じており、よりひろい世界史的な文脈から留学をめぐる思想と行動をとらえなおし、留学者の動静や影響を多角的に検討しながら、そこでの「知」のありかたを立体的・動態的に解明しなければならないように思われる。そのためには留学を促進した国際関係のダイナミクスや、留学をめぐる地域的・帝国的状況をふまえなければならないし、文明化のエージェントとしての理解についても、「西洋文明の普遍性への接近、到達の過程としてとらえるのではなく、いくつかの文明や文化の選択と創造の過程としてとらえる」（ひろたまさき「文化交流史研究の課題」、文化交流史研究会編『文化交流史研究』創刊号、1997年）ことが大切であろう。留学をめぐる主体形成のありように関しても、ナショナル・アイデンティティの構築にア prioriに結果しない、プロセスとしてのアイデンティティの揺らぎやそのあらたな問い直しの可能性まで、丁寧に掘りおこしていかなければならないのではないだろうか。この点に関連して示唆に富むのは、キリスト教の宣教活動を対象にした、駒込武の『『文明』の秩序とミッション—イングランド長老教会と19世紀のブリテン・中国・日本—』（『年報・近代日本研究』19（地域史の可能性—地域・日本・世界—）、山川出版社、1997年）である。イギリス帝国と日本、そして中国・台湾を「串刺し」にしながら、『中心』と『周縁』の文化の関係史を、『西洋』と『日本』という一元的な対立軸ではなく、幾重にも折り重なった入れ子構造として分析」するものであり、「文明化の使命」の担い手たるミッションを文字どおり世界史的コンテクストとして論述している。駒込の研究は今後の研究のひとつの方向性を指ししめす、重要な位置を占めるものとみることができよう。

### 3 アジアにおける留学

あらためて19世紀後半から20世紀にかけての留学の動向をふりかえると、日本は数的には「留学生送出国」というより、圧倒的に「留学生受入国」であった。幕末から明治にいたる欧米諸国への日本人留学生は、あらたな国家機構のキーポジションに配されて機能したため、この国における近代化の原動力として脚光を浴びがちだが、やはりウエスタン・インパクトへの対応を余儀なくされた、朝鮮や中国をはじめとするアジアから来日した留学生は、総じてみればケタがちに多かったのである。留学生の送出・派遣のありかたは、辻直人が一部明らかにし

ているように、高等教育の発展・整備にもなって変容するが（辻「明治30年代の文部省留学生選抜と東京帝国大学」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第40巻，2001年，同「文部省留学生制度における高等学校の位置付け」，日本科学技術史学会編『科学技術史』第5号，2001年），留学生の受入・招致との関係にも注目しなければならない。当然のことながら日本の帝国化と植民地支配の問題が射程に入ってくるが，ここでは中国からの留学を中心に研究動向をみていくこととし，日本統治下の朝鮮からの留学に関して節を改めてレビューすることにする。近代世界の留学をとおした「知」の連環とその構造を描出するためには，その不均衡な両側面を統一的に把握する視点や枠組が求められるであろうし，この地域における送受関係の成立と展開もまたグローバル・スケールでとらえなおすことが課題となるであろう。

研究動向を概観するにあたって，アジアからの留学史を考えるうえでさしあたり重要と目される視角について，関連する先行研究から指摘しておきたい。ひとつは松沢弘陽のいう，開国以来の海外渡航者における「西洋・中国複合経験」であり，日本と西欧の文化接触を中国の介在した三角関係としてとらえるべきとする見方である。この「経験」をとおして，西欧世界を引照基準とした「新しいしかしゆがんだ」中国像が成立したのであり，「このような特異な中国経験を生み出す交通路が帝国日本の社会制度の中に組みこまれて確立」したという（松沢『近代日本の形成と西洋経験』岩波書店，1993年）。これは制度的構築の次元をふくむ，主として「留学生受入国」としての歴史的体質につうじる問題となるであろう。もうひとつは，山室信一が日本を「欧米と東アジア世界をつなぐ知の結節環」であったとし，日本への留学を「思想連鎖の最も重要な回路」と位置づけていることである。アジアのなかでいち早く近代化に即応した日本は，「非西洋世界の人々が国民国家形成を模索するに際して模範ないし反模範としての素材を提供」したのであり，その「思想連鎖」は「あくまでも補完的なもの」であったが，「歴史的にも特筆に値する現象」であったという（山室『思想課題としてのアジア—基軸・連鎖・投企—』岩波書店，2001年）。これは日本留学の位置関係を近代世界秩序のなかで考えるための，基準的な視座を提供するものであろう。

アジアから日本への留学史に関する研究が全般的そして本格的に展開したのは，やはり世界的な植民地の独立や国家間の相互依存の増大を背景として，「国際化時代」が叫ばれはじめた1970年代からとみられる。国立教育研究所における共同研

究の成果である、『アジア人の日本留学—「アジア人留学生に関する総合研究」報告書—』（国立教育研究所紀要第89集，1976年），『アジアにおける教育交流—アジア人日本留学の歴史と現状—』（国立教育研究所紀要第94集，1978年）は、その期を画するものといってよい。当時の「開発途上国からの留学生受入れの充実・整備」を図らなければならないという時務的な課題認識のもと、アジア諸国の留学生派遣事情や日本の留学生受入体制の問題を「歴史的観点に立ち、而も長期的展望の中で検討する」ことを意図したものである。とくに後者の報告書には13編の歴史に関する論文・資料が集録されており、阿部洋，細野浩二，二見剛史，斎藤秋男，佐藤尚子による「中国近代における日本留学」関係と，阿部洋，上沼八郎，渡部学，小林文男による「朝鮮・台湾における日本留学」関係のほか，村田翼夫，赤木攻，弘中和彦によるタイおよびインド関係の論文から構成されている。この共同研究を組織した阿部を中心とするメンバーたちが、その後における留学史研究をはじめアジア「教育交流」史研究をリードする。

中国からの留学史について瞥見すると、さねとうけいしゅう（実藤恵秀）による『中国人日本留学史稿』（日華学会，1939年），『中国人日本留学史』（くろしお出版，1960年，増補版1970年）などがすでに存在しており，基本的にその業績を継承・発展させながら活発に研究が展開されている。まとまった成果だけを列挙しても，朝鮮などにも目配りをした上垣外憲一『日本留学と革命運動』（東京大学出版会，1982年）から，小島淑男『留日学生の辛亥革命』（青木書店，1989年），巖安生『日本留学精神史—近代中国知識人の軌跡—』（岩波書店，1991年），小林文男編『中国人日本留学史の研究—戦前期・留日学生の記録—』（平成5年度科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書，1994年），二見剛史『〈論文集成〉中国人留学生教育と松本亀次郎』（鹿児島女子大学，1994年），周一川『中国人女性の日本留学史研究』（国書刊行会，2000年），大里浩秋，孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』（御茶の水書房，2002年），河路由佳，淵野雄二郎，野本京子『戦時体制下の農業教育と中国人留学生—1935～1944年の東京高等農林学校—』（農林統計協会，2003年），王嵐『戦前日本の高等商業学校における中国人留学生に関する研究』（学文社，2004年）など数多い。阿部の『「対支文化事業」の研究—戦前期日中教育文化交流の展開と挫折—』（汲古書院，2004年）も，中国人留学生の受入と教育の問題を扱っているし，蔭山雅博は「宏文学院における中国人留学生教育—清末期留日教育の一端—」（教育史学会編『日本の教育史学』第23

集、1980年)以来、その事例研究を継続的に深めている。宏(弘)文学院を卒業した魯迅など、日本留学を中心にすえた中国知識人・思想家の伝記的研究も少なくない。

教育史学会の機関誌である『日本の教育史学』には、「日本」「東洋」「西洋」の各研究動向が毎年掲載されているが、そのうち「東洋教育史の研究動向」を通覧すれば、留学史はひとつの研究領域を形成しているといつてよいほど、おびただしい数の論文・著作が量産・蓄積されているのがわかる。中国からの留学に関しては、すでに1992年の時点で辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門—現状と課題—』(汲古書院)に小林共明「留日学生史研究の現状と課題」が出ており、1996年の教育史学会40周年記念シンポジウム「教育史研究の課題と方法」では、蔭山が「留学生教育史研究の多様化と深化」をひとつの動向として指摘していた(『教育史学会40周年記念誌』1997年)。こんにちまでの研究状況を検証すると、いくつかの特徴的な流れがみいだせそうである。

まず中国の「改革・開放」政策下で公開の進んだ史料が活用されるようになり、現地での留学経験者などへの聞き取り調査も行われていること、現在の中国人留学生を主たる担い手とする中国側からの調査研究が進展し、日本側との共同研究も盛んになっていることが挙げられる。また最も関心を集めてきたのは、中国の革命運動あるいは近代化と日本留学との関係であるが、それについて日中関係史のなかでの位置づけや日中双方における政治的意図・対応が具体的に吟味され、留学生の教育・学習や日常生活、帰国後の活動などの実態が実証的に検討されるなど、日本留学の位相がマクロとミクロの視点から多面的に考察されるようになってきたことがある。さらに時期的には、これまで日清戦争を機に「日本留学ブーム」を招来したといわれる清朝末期に重点が置かれていたのが、中華民国期から日本政府が国策の一環として留学生の受入・教育を積極的に推進した1930年代以降、戦後にいたるまで開拓されつつあることも注目される。前掲『戦時体制下の農業教育と中国人留学生』の河路の論考などがそうだが、このことはたんにタイムスパンを延長して研究対象の拡大を導くにとどまらず、蘆溝橋事件の勃発した1937年をもって中国人日本留学史の終点とした、上述のさねとうの古典的業績を批判的に相対化し、かつ戦後日本の留学生政策の動向を通時的な位相のもとでとらえる途をひらくものである。

川島真は前掲『中国人日本留学史研究の現段階』のなかで、「日中関係史におい

て『友好』史観が相対化され、また中国近代史研究において革命史観への見なおしが進むと、史料公開が進んだこともあいまって、留日学生史研究にも新たなパラダイムが求められるようになった」と概括している。「教育交流」という観点から展開された従来の研究は、時間軸に沿ってみれば「成功と失敗」「栄光と挫折」、空間的にみれば「教える日本」と「教わる中国」という二項対立的な見方が概して強かったように思われる。それは国際社会の一員としての日本という自覚と責任を背景に、時務論的な問題意識に即して取りくまれたことも関係していようが、結果的には時期的な偏重は免れなかったし、日本や中国というネーションワイドな枠組を自明の前提としつつ、一方通行的な歴史像を構築することになったといわねばならない。阿部は清末以降の教育改革における「日本モデル」から「アメリカモデル」への「流れの転換」を指摘しているが（阿部『中国の近代教育と明治日本』福村出版、1990年）、「知の結節環」として日本をとらえた場合、あらためて「モデル」の意味あいを世界史的文脈から再考する必要があるのではないか。そして国家単位の見方を流動化させながら、留学生に関係した日本人が「教えながら教えられる」ような側面や、さらには日本人の中国留学についても解明を進め、アジアにおける留学の位相を多元的にみつめなおすことも、今後の課題となるように思われる。

#### 4 植民地と留学

平川祐弘は「留学生の文化史的意味」と題する論考（賀来景英、平野健一郎編『21世紀の国際知的交流と日本—日米フルブライト50年を踏まえて—』中央公論新社、2002年、所収）において、「明治期留学生」をめぐる次のように述べている。「多くの日本人は、明治時代に日本人が西洋に留学したことは承知している。しかしそのことは知っていても、外国人が明治日本に留学しに来たことについてはおおよそ知らない」「明治日本は西洋へ留学生を送り出したことで、目が西洋に釘付けとなり、西洋的価値観でアジアを見下ろした。その一辺倒ゆえに日本人は今日にいたるまで東洋から受け入れた明治期留学生が見えなくなっていたのである」。そして「明治期留学生についてその伏せられたままの一面にもきちんと光をあててこそ、日本の留学生の文化史的意味の全容は解明されるのだらうと考える」とかれは結ぶのだが、はたしてその前提にある見方は正鵠を射ているのだろうか。これまでみてきたように、たしかに欧米への留学史研究は厚みがあるが、

それにもましてアジアからの留学史研究は進捗と蓄積を重ねている。このような非対称的な関係認識は、「多くの日本人」のそれというより、この比較文化研究の泰斗に占める西洋中心的思考の裏がえしとみられ、その思考枠組がもたらす先入主によるものといわざるをえない。さらに黙視することができないのは、平川がアジアから来日した「明治期留学生」としてただちに想起するのが、上述した清朝末期の多数の中国人留学者であって、日本の植民地となった台湾や朝鮮からの留学生には一顧だに与えていないことである。こうした植民地からの留学生については、「伏せられたままの一面」のうちに意識されていないわけで、とりわけ「明治期」以降に「内地」での修学をめざして数多く来日したという事実は、平川の視野の圏外に置かれているようである。

以下においては、植民地からの「内地」留学に関する研究状況に注目し、その動向と課題にふれてみたいと思う。これについても1970年代に調査研究が着手されており、渡部宗助「アジア留学生と日本の大学・高等教育—植民地・台湾からの留学生の場合—」（広島大学大学教育研究センター編『大学論集』第2集、1974年）がその先駆をなす。前掲の『アジアにおける教育交流』（1978年）にも、阿部洋「二十世紀初頭における朝鮮人の日本留学—『韓国皇室特派留学生』の場合—」、上沼八郎「日本統治下における台湾留学生—同化政策と留学生問題の展望—」といった関係論考が収録されている。渡部、上沼の両論文は問題設定は異なるが、ともに台湾が日本統治下に置かれた1890年代から、「内台共学」が体制化される1920年代を中心とした通史的研究である。阿部論文は「日韓併合」直前における韓国政府の派遣事業に着目した研究だが、阿部は同時期、基礎的研究として「旧韓末の日本留学—資料的考察—」（Ⅰ）～（Ⅲ）（『韓』第3巻第5～7号、韓国研究院、1974年）のほか、「解放」前韓国における日本留学」（『韓』第5巻第12号、1976年）として「植民地支配下における日本留学」まで扱う通史的研究なども発表している。

朝鮮からの正式な日本留学は、1881年に紳士遊覧団の随員として訪日した兪吉濬、柳定秀らが慶應義塾などに入学したことをもって嚆矢とし、開港以後の東アジア情勢や政権抗争に影響されながら、日本側の積極的な働きかけとからんで「開化」政策の一環として展開される。ここではいっさい取りあげないが、この点は朝鮮における「自主的近代化」の跡を探ろうという課題意識から、人物思想研究をふくめて日韓双方で数多くの研究がなされている。日本統治下に関する研究

は、それに比して遅滞していたといわざるをえないが、ようやく1990年代後半より、その実態・影響・意味などにせまった研究成果があらわれるようになった。主要なものを挙げれば、朴己煥の「旧韓末と併合初期における韓国人の日本留学」（慶應義塾福澤研究センター編『近代日本研究』第14巻，1998年），朴宣美の「朝鮮社会の近代的変容と女子日本留学—1910～1945年—」（京都大学文学部内史学研究会編『史林』第82巻第4号，1999年）などがあり，前者は「近代日韓文化交流史研究—韓国人の日本留学—」（博士学位論文，大阪大学，1999年），後者は「植民地時期における朝鮮人女子日本留學生の研究」（博士学位論文，京都大学，2004年）として大成されている。やはり留學生の手になる業績であり，孫煥の「戦前の在日朝鮮人留學生のスポーツ活動に関する歴史的研究」（博士学位論文，筑波大学，1999年）というものもある。講演記録ではあるが，同志社大学人文科学研究所編刊，水野直樹『朝鮮人留學生たちの京都』（人文研ブックレットNo16，2003年）も付けくわえておきたい。

とくに総力戦下に焦点づけたものとしては，橋本隆祐「朝鮮出身學生の苦悩と大学」（白井厚編『大学とアジア太平洋戦争—戦争史研究と体験の歴史化—』白井厚教授退職記念論文集，日本經濟評論社，1996年），姜徳相『朝鮮人学徒出陣—もう一つのわだつみのこえ—』（岩波書店，1997年），漆畑充「植民地期における朝鮮奨学会に関する一考察」（『日本の教育史学』第48集，2005年）などが出ている。台湾からの「内地留学」に関しては具体的に紹介しないが，やはり1990年代後半以降，その位相を掘りさげた研究物が発表されてきている。朝鮮と台湾の双方に目配りをした基礎的研究として，佐藤由美，渡部宗助「戦前の台湾・朝鮮留學生に関する統計資料について」（日本植民地教育史研究会編『植民地教育史研究年報』第7号，2004年）などもある。こうした研究動向と関連して言及すべきは，各大学にて編纂・刊行が行われている大学百年史などにおいて，朝鮮や台湾からの留學生の状況が記録・記述されるようになったことである。とくに1990年代に入り，かつて多数の留學生を抱えていた明治大学，日本大学，中央大学などの私立大学でその具体相の解明と叙述が進んだが，中野光「『大学史』における学徒出陣と朝鮮・台湾出身學生」（『中央大学史紀要』第11号，2000年）は，その動向と意義にふれている。帝国大学を前身とする東京大学や九州大学においても，植民地地下にかぎらずアジア全体を視野に入れた留學生の受入制度・動向・実態などの調査研究が推進された。近年の九州帝国大学に関する成果として，九州大学韓国

研究センター編刊『朝鮮半島から九州大学に学ぶ—留学生調査（第1次）報告書 1911～1965—』（2002年）、折田悦郎編『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』（平成14・15年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書、九州大学大学史料室、2004年）を挙げておく。

「内地留学」という呼称やその扱いは時代が下るにつれて変化し、「留学」か「進学」か当事者の認識も一様でないから、そのこと自体考察対象となりうるが、これまでの研究において、留学生の受入・修学状況とその推移、学校種別・専攻分野別の特徴、出身地域や社会階層上の特性、あるいは留学生団体の結成・活動や民族運動との関係などが課題化され、史料の発掘・考証とともに明らかにされつつある。前述した中国からの留学に関する研究状況と異なり、植民地下の留学史についてはここ十年ほどの間に本格化し、1990年代後半の研究結果からうかがわれるように、単純な支配と被支配の構図、抑圧と抵抗の図式を超えた議論が展開されている。見方を変えれば、かかる二分法ないしは二元論的な認識枠組を脱却・克服しようという研究状況のなかで、植民地留学生の問題がクローズアップされてきたといえるかもしれない。たとえば朴宣美の前掲学位論文が、オーラル・ヒストリーの手法を用いながら留学の動機や意識を分析し、ジェンダー史研究の立場から植民地的近代化の実相を明らかにしているのは、興味深いものがある。

植民地期朝鮮における高等教育の抑制は「内地」への留学を促進したが、総督府は当初の大幅な制限から、1920年代に入って自由化へと方向転換を図り、学歴取得や立身競争を水路づけながら積極的に親日勢力を育成しようとする。渡部宗助はすでに前掲の1974年論文において、「日本の大学・高等教育が留学生達に何を与え、何を与えなかったかという側面と留学生達の存在が、日本の学生の知性的、感性的形成にいかなる意義を有したかという両面からの考察が必要であろう」と課題提起をしているが、この点は今後さらに追究していかなければならないであろう。植民地下の留学が帝国日本の教育体制や「知」の分配構造とどのように結びつき、「知」の帝國的構造が留学生を媒介としてその後の社会形成をいかに導いたのかということは、やはり重要な論点である。帝国の拡大にともなって留学の位相は複雑・多様化するが、植民地エリートのなかには帝国内にとどまらず、欧米への留学者もいたわけだから、それらにも照明を当てながら「知」の連環をトータルに考察する必要がある。帝国と植民地支配の文脈を抜きにして、その構

造と性格の世界史的説明は完結しないであろう。

#### おわりに

以上不十分ながら、「日本の近代化と留学」「アジアにおける留学」「植民地と留学」にいちおう分けて、留学史に関する研究動向を筆者なりに整理・概括してみた。たんなる研究紹介に終わらないよう心がけたが、一方でその紹介部分にも精粗や濃淡があり、国外の研究もフォローできていない。他方で当初の構想では、アメリカなど他の西洋諸国への留学や、「満洲国」それに「大東亜共栄圏」建設下の留学政策に関する先行研究などにも言及し、課題の展望におりこむつもりであったが、紙幅の制約もあって断念した。筆者は「越境する教育史研究の課題と方法」をテーマとした2003年の教育史学会第47回大会シンポジウムにおいて、「対欧米ないしは対アジアのどちらかいっぽうにおいて完結する関係にとどまらず、その相互にまたがる国境をこえた世界史的な連環構造とダイナミズムを解明していくこと」を課題提起したが（拙稿「教育勅語の翻訳と帝国主義世界」『日本の教育史学』第47集、2004年）、本稿は留学史に関する研究史に即して「知」の連環と構造という視点から、その課題へのアプローチを模索したのもでもある。さいごにこれまで述べてきたことと関連して、渡部宗助が「研究課題」として記していることを紹介し、結びにかえることにしたい。「留学生の派遣・行き先は欧米中心、留学生の招致・受け入れはアジア中心、という構造は戦前・戦後で変化していない。つまり留学生の流れは、双方向的ではない。また、日本の大学・高等教育機関に在籍する留学生数の比率は1.5%と「先進諸国」に比べ極端に低いことも指摘されている。これらの問題の歴史的究明は、文明・文化の啓蒙史観の克服を含んだ教育史研究として独自に考察すべき研究課題であろう」（渡部「留学生」、久保義三、米田俊彦、駒込武、児美川孝一郎編著『現代教育史事典』東京書籍、2001年）。